



建学の精神

国際基督教大学は、キリスト教の精神に基づき、世界人権宣言の原則のもと、自由にして敬虔なる学風を誇りとしています。その目的は、国際的社會人としての教養をもって、神と人ともに奉仕する有為の人材を養成し、恒久平和の確立に資することにあります。

献学以来、その名に示される通り、国際性への使命(I)、キリスト教への使命(C)および学問への使命(U)の三つを掲げ、その実現に努めてきました。



国際基督教大学 校章・マーク
地球を表わす楕円の中に英語での校名
「INTERNATIONAL CHRISTIAN UNIVERSITY」の頭
文字「ICU」を配置したものです。

学校法人 国際基督教大学

〒181-8585 東京都三鷹市大沢3-10-2

TEL : 0422-33-3131 FAX : 0422-33-9887



創立

国際基督教大学(ICU)は、日本の「リベラルアーツ・カレッジ」として、1953年(昭和28)に献学しました。1859年(安政6)に、横浜、長崎に6人の宣教師が上陸し、私的ミッションスクールを始めたことで、日本人青年の中にも熱心なキリスト者が輩出されるようになりました。彼らは〈バンド〉を結成し、日本全土で信仰の種火となっていきました。1883年(明治17)大阪で宣教会議が開かれて以来、日米のキリスト者は、超教派のキリスト教大学を設立しようという願いを、長年にわたって抱いてきました。しかし、各教派の伝道組織が支援する学校間での調整の難しさや、募金運動の失敗などの理由で、その願いはかなえられませんでした。

第二次世界大戦の敗戦からわずか数週間後の1945年(昭和20)秋、キリスト教精神に基づく総合大学の設設計画は、東京女子大学理事会において、再び議題に上りました。翌年6月、事業がいつそうの公共性を有するために国際基督教大学建設委員会へと改組されます。同年11月、横須賀・田浦で行なわれた基督教教育同盟会の修養会で、湯浅八郎が学長へ推挙されましたが、1947年(昭和22)春から同志社の総長に復帰が決まっていたために、いったんは断っています。

1949年(昭和24)6月15日静岡県御殿場のYMCA 東山荘における大学組織協議会には、その前年にニューヨークに設立された〈日本国際基督教大学財団〉(JICUF: Japan International Christian University Foundation, Inc.) のディップフェンドルファー会長をはじめ、日本のキリスト教界や教会関係の指導者がすべて集まりました。この会で、国際基督教大学の基本方針が明確にされていき、湯浅は再び学長に選出されています。二度目の推挙のときには、同志社理事会から仕事の重要性を説かれ、同志社の職務を軽くして兼任ということで承諾するように促されました。

湯浅の初代学長就任は、当時マッカーサー元帥によって進められていた民主化政策によってICUができたのではなく、あくまでも日本が自発的に望んでつくられたキリスト教大学である、という事実を印象づける役割も果たしました。

創立の背景と歴史

初代学長の湯浅八郎の父 治郎は、同志社創立者の新島襄の故郷である群馬県安中において味噌・醤油製造を営む老舗で、新島の影響でキリスト者になったプロテスタント第一世代。母 初子は徳富蘇峰、徳富盧花兄弟の姉です。18歳で少年移民として単身渡米、イリノイ大学で昆虫学専攻で学位を取得しています。京都大学時代には人類学者の今西錦司のような優秀な人材を育てました。

資金調達之苦労や、超教派としての難しさ、また既存の学校との距離の取り方など、ICUは設立当初からたくさん課題を抱えてスタートしました。しかし湯浅は、足りないものばかりの未完な大学を「明日の大学」と呼ぶユーモアとカリスマ性に富んだ人物でもありました。

日本にキリスト教大学をつくりたい、という熱心な希望の背景には、日本の教育事情も影響しています。公教育が万全に整えられ、帝国大学を頂点とした国家的教育制度が力を持っていた日本では、当時の私立学校、特にキリスト教学校は専門学校に留まり、学位を与える資格もなかったのです。1945年(昭和20)秋に行なわれた東京女子大学理事会の議題は、キリスト教系の学校が戦時下でどのような状況におかれたかを明らかにするものでもありました。戦争が終わり、キリスト教学校教育は新たなスタートを切る気運に満たされていたのです。

女子の高等教育機関としての大学設立運動のほうは、1918年(大正7)合同ミッションの援助のもと、東京女子大学の開校によって実現されています。しかし、キリスト教大学をつくりたいという長年の夢は、何度も挫折を味わってきました。

1945年(昭和20)10月に、本郷教会において旧・日本基督教協議会の会議に、北米教会連盟協議会と北米外国宣教協議会から派遣された4人の代表団がいきなり参加したことは、日米両国のその思いを再燃させる出来事でした。彼らは戦後、太平洋を渡った最初の民間人であり、「和解ではなく、未来に向けての一致協力のために来た」と言いました。

代表団の訪問はまた、1941年(昭和16)キリスト教連盟によって親善使節団が結成され、アメリカのキリスト者と平和の祈りを共に捧げるために訪米したことへの答礼でもありました。ちなみに、当時リベラル派への弾圧によって同志社第10代総長を辞任して渡米していた湯浅八郎が、日本から派遣された7人の親善使節団を出迎えています。

アメリカと日本の双方で募金活動は進められましたが、朝鮮戦争の勃発にも伴い、それは大変な困難を伴いました。アメリカ側のディップフェンドルファー会長は、激務に立ち向かい、不幸なことに職務中に亡くなってしまいます。アメリカ・ヴァージニア州リッチモンドのギンター・パーク長老教会牧師 ジョン・マクリーンは、AP通信を通じて「広島と長崎に哀悼の意を表し、和解の願いの表われとして、再建のための献金を」と呼びかけました。日本では、中央委員会の委員を務めた森村市左衛門(元・男爵で森村銀行頭取)の口利きで、日本銀行総裁の一万田尚登を後援会長とすることができました。1950年(昭和25)敗戦後の困窮の時代に、1億5000万円の目標額を超える浄財が集められ、その多くはノンクリスチャンからの寄付だったといえます。



初代学長 湯浅八郎(1890~1981年)
箴言29章18節から「幻(ヴィジョン)なければ民滅ぶ」と口にしていました。